

(第6表) 高木層に出現する頻度が高いが、優占することの少ない樹木

ウダイカンバ
オヒョウ
ハリギリ
オオヤマザクラ
オニグルミ
ホオノキ
ヤマモミジ
アオダモ

*注：クラスターへの出現率が50%以上のもの。



(参考) 高木層優占種からみた北海道の林

- ◆ミズナラ・シラカンバ林
- ◆エゾイタヤ・ミズナラ・シナノキ・ケヤマハンノキ林
- ◆トドマツ・エゾマツ林
- ◆ヤチダモ・ハルニレ林
- ◆ダケカンバ林
- ◆ハンノキ林
- ◆ケヤマハンノキ林
- ◆ブナ林
- ◆エゾイタヤ・アカイタヤ・ハルニレ林
- ◆カツラ林
- ◆シナノキ・キハダ・ミズキ林
- ◆エゾノバッコヤナギ林
- ◆ハリエンジュ林

*注：クラスターに所属するスタンドが5個未満のものは除いた。

並木ウオッチング

村野紀雄

今、札幌で一番多い並木は、ニセアカシアで、次いでナナカマド、イチョウ、プラタナス、シダレヤナギということになっていて、これらだけで、札幌の並木の70%以上を占めている。

本道全体でも地域により多少の変化はあるが、これと大体似かよった状況である。ちがうところは、全体ではナナカマドがトップであることだ。

5年ほど前に、道民意識の調査のなかで「身の回りで愛着を感じる木」としてあげられたものはナナカマドがトップで、次いでアカシア、ライラック、ポプラであった。

上位にあげられたこれらの木は、いずれも明るくはなやかなイメージを与えるものである。

しかし、考えてみると、これらの木は、確かに見る人に好まれる面はあるが、それより、植える側に都合がよいから植えられてきたという面が大きいように思われる。意識調査では、こういうものばかりが身の回りにあるから選ばれたと考えることができる。

一般に、街路並木を植える時、その樹種を選ぶ観点としては、生長が早く、形がよく、病虫害に強く、剪定にも強く、排気ガスなどの多い街路条

件に耐え、管理のしやすい木ということになる。

並木興亡の歴史は、このような木の選択のくりかえしといえるが、実は、狭小な空間、短期の生長期間の中に樹木をおしこめる歴史であったと見ることができる。

ウォッチングを楽しむ側からみると、そうした、狭小、速成のものから離れた、木そのものの美しさということが最も大きな関心事となる。

樹木の美しさ、深さは、木そのものの健康や、あたりとの調和、人為と自然との一体感の中に見出される。

そうした中で、ウォッチングを深めれば深めるほど、現在の並木に物足りなさを感じさせられてくる。ナナカマドは美しくはあるが、これに代表される現在の並木の大半は、あまりにこぶりである。きれいではあるが平板だ。小さな方が狭い街路空間に合わせて植えられやすいわけだ。そして、一般には、街路樹、並木とはこんなものだと思わせてきたのではない。

しかし、もうこのへんで自然の健康な大樹の並木が欲しくなってくるのである。

といて、現実の街路が、空間的に大きな並木をつくるには困難な状況が重なりあいすぎているのも本当だ。大きい木に育てるには時間もかかる。

そのような現実ではあるけれども、それぞれの町に1カ所だけでもいいから、樹種は何でもいいから、無理してでも大木となる並木をつくったかどうか。無理してといっても、空間と、時間とてまを与えればできないことはないのだ。50年100



モミジバズカケの並木 (ロンドン・ハイドパーク)



ヨーロッパの並木 (アムステルダム駅前)

年先にはこうなるんだという方針をしっかりとって、生長を次代にどんどんつないでいけばいい。

さて、今、世界で、街路樹として使われている木は、およそ500種、日本では130種ほどといわれているが、実際には、どの都市でも10~20種程度でその大部分が占められている。

実際のところ、街路樹として使える樹種は、求められる条件が厳しいことからあまり多くないのである。

そのうちでも、よく使われているのが、リンデン、マロニエ、エルム、プラタナスの4種で、これらは、世界の四大並木樹種といわれている。

ちなみに、リンデンとはシナノキ類、マロニエとはトチノキ類、エルムとはニレ類、プラタナスはスズカケノキ類のことで、いずれも巨木となる樹種である。

ヨーロッパにおけるこれらの大樹の並木道を歩くと何ともいいあらかせない充実感、壮快感にとられる。一方、本道におけるこれらの樹種を含む多くの並木を見ると、大樹となるべきものも小樹のままにおしつめていることが多い。

(内外の並木スライド映写、説明省略)